

## 「ラジオの夢」の栄光と挫折

—Goodman, David. *Radio's Civic Ambition: American Broadcasting and Democracy in the 1930s*.—

長崎励朗

### 一 はじめに

本書はアメリカのラジオ史を扱った歴史研究である。焦点を当てている時代は主に一九三〇年代から四〇年代前半までの時期だ。世界的に見れば、大恐慌から第二次大戦にいたるまでの時代を扱った研究ということになる。

メディア論という学問領域にとつて、この時代は特別な意味合いを持っている。社会心理学やメディア論の萌芽ともいえる偉大な研究業績が多く生み出されたからだ。当時、思想戦の一環として効率的なプロパガンダの方法が模索され、同時にそれを防ぐための対策

を生み出そうと様々な分野の学者が躍起になっていた。戦間期から戦中期にいたるまでの情報戦こそがメディア論の生みの親だといえるのである。

この時期に最も強い影響力を持ったメディアの1つがラジオである。一般にラジオは内容だけでなく、声の調子や話し方も伝えるため、人々の理性よりも感情に訴えかけるメディアだと考えられてきた。ルーズヴェルト大統領の炉辺談話やナチスドイツによる国民受信機の普及はあまりに有名である。

こうした「常識」に鑑みれば、本書のタイトル『Radio's Civic Ambition』が、その名の通り、いかに野心的なものであるかがよくわかる。冷静かつ理性

的な討議を尊ぶ市民的価値観と相反するイメージを持つラジオに託された市民的野望とは何か。本書はラジオがまだニューメディアであった時代に夢見られた理想の盛衰を豊富な資料によって跡付けた研究である。

本書は歴史書ではあるが、編年体ではなく、各章ごとにテーマが設定されており、それを軸に議論が構成されている。それらのテーマは、大きく分けて三つの論点に集約される。第一に「自由」という概念の捉え方をめぐる論点、第二に娯楽と教育の融入口という論点、そして第三に市民的教育観に関する論点である。以下、本論文ではこれらの論点にそって、本書の内容を整理し、検討を加えていく。

## 二 「自由」というマジックワード

本書の前半部はアメリカの放送が持つ特殊性について繰り返し言及している。それは、公共放送や国営放送が存在せず、全て民間企業によって運営されている

ということだ。そしてこのシステムこそがアメリカの「自由」の根拠となっていく。まずはアメリカの商業放送ネットワークによる広報戦略を概観しておきたい。

### 仮想敵としてのBBC

この体制が確立されるまでには、多くの議論が交わされた。非営利機関による放送の割り当てを確保することを主張する論者や、アメリカ版のBBCを作るように要請する論者など様々な立場から商業放送の独占状態を批判する意見が噴出していったのだ。従来、こうした議論は、一九三五年にFCCが発表したレポートで決着を見たと考えられてきた。FCCがこのレポートで、割り当てを作る必要はなく、教育機関が既存のラジオ局と連携することが望ましいという結論を下したからだ。しかし、むしろここからの十年間こそ、アメリカの放送業界にとって試練の時だったと筆者は主張する。一九三〇年代後半のラジオは「自由市場と公共の利益が恒久的に葛藤を繰り返す場」であったと

いうのだ。

このような状況に対処するために、商業放送ネットワークは「ホンネ」と「タテマエ」を使い分けるようになった。ルーズヴェルト大統領をはじめとする政府の要人に対しては、いつでも好きな時に放送局の設備を用いて欲しいと熱心に協力を申し出る一方、タテマエとしては、「アメリカのラジオは政府に干渉されない世界で唯一の自由なラジオである」というストーリーを喧伝したのである。

放送業界にとってはこの「タテマエ」こそが死活的に重要だった。このストーリーを浸透させるために商業放送ネットワークがとった広報戦略は非常に巧みなものだ。宗教的マイノリティのための非営利放送の重要性を訴える宗教家や進歩的教育者による批判の矛先をかかわすために、海外の、とりわけBBCを仮想敵として持ち出したのである。当時、BBCは世界で最も評価されている放送システムだった。アメリカの放送業界側がBBCを仮想敵として指弾したのは、BBC

が世界的に受けていた肯定的な評価を無視できなかつたという理由もあつたのである。にもかかわらず、アメリカの放送ネットワークはBBCを悪玉に仕立て上げることに成功した。アメリカ人の中に根強くあつた「自由」という言葉を利用したのが勝因である。

BBCは当時イギリスに存在した唯一の放送局ではあつたが、国営ではなく、公共放送という位置づけだった。受信料を徴収しているところからも分かるように、国家からは独立した放送局だったのである。しかし、合衆国内の商業放送ネットワークは、ハンドブックを発行するなどの手段によって、「BBCは政府によって所有され、管理されている」という観念を大衆に植えつけた。当時、BBCでディレクターを務めていた人物は、こうした考え方が「悪意を持って流布された」ものであると証言している。商業放送ネットワークはこうした観念を植え付けることによって、BBCとアメリカのラジオシステムを対比させ、「アメリカのラジオは政府によって統制されることのない世界で最も自

由なラジオである」と主張したのだ。

### 「アメリカン・システム」

アメリカ社会において、「自由」というトピックは異様なほどの重要性和普遍性を帯びていたと筆者は言う。だからこそ、この放送システムが「アメリカン・システム」と呼称された際も大衆にはあつさりを受け入れられた。この言葉は一九世紀前半、米英戦争後の経済計画を指す言葉として初めて用いられたもので、アメリカのナショナリズムと密接に結びついていた。この言葉を用いることで、「自由対統制」という図式を瞬時にアメリカ国民にイメージさせることができたのである。

「アメリカン・システム」という言葉によつて想起される二項対立図式は、第三の可能性を覆い隠すためにも有効だった。当時の各国のラジオシステムを見渡せば、多くの国で国営、あるいは公共放送と商業放送の両方が並置されるシステムが大勢を占めていた。こ

れは、「デュアル・システム」や「混成システム」と呼称されるものだ。あるオーストラリアの商業放送職員は、アメリカにこのシステムを取り入れる利点を熱烈に論じた。二つのシステムが併存することで、公的な事柄を国営放送や公共放送にまかせることができ、かつて商業放送は自由にふるまえるというのである。

しかし、アメリカの商業放送には、こうした発言さえも、自分たちの領域を侵す危険な提案として受け止められ、イギリス以外の他国の放送システムについてはほとんどアメリカ国内で言及されることがなかったという。

こうした流れの中で、アメリカ国内では次第に政府が介入することと自由を奪われることが同一視され、「自由か？統制か？」というアメリカ人にとつて答えの決まったオール・オア・ナッシングの単純な対立軸へと論争は収斂していったのである。しかし、そこで繰り返し喧伝される「自由」の内実は不問のままだった。政府から自由であれば本当に自由だと言えるのか。

大企業による支配からの自由という発想はあり得ないのか。といった今日にも通じるような問いを発する人々もいたようだが、ごく少数であり、彼らの発言はほぼ例外なく黙殺されたという。アメリカの商業放送は「自由」というマジックワードを用いることで、アメリカ大衆の心をつかみ、支配権を確立したといえよう。

以上のように、本書に繰り返し登場する放送の「アメリカン・システム」は、「自由」というマジックワードによって確立された。国家レベルの宣伝戦に注目が集まりやすい時期の歴史研究であるにもかかわらず、商業放送ネットワークによる広報戦略に目を向けるといふ本書の着眼点は非常にユニークだといえる。ただし、あえて言うなら、BBCとアメリカの商業ネットワークの間で隠然と行なわれていた広報合戦は、やはり情報戦の一面面であったのではないだろうか。自分たちの既得権益を確保することに必死だったアメリカの商業放送はともかくとして、アメリカで様々な広報

活動を展開しようと試みるBBCの姿からは、イギリスが当時から持っていた文化政策への熱意が透けて見える。放送システムの覇権をめぐるこうした暗闘の中にも、今日的なソフト・パワーの問題を考察する端緒が隠されている可能性は十分にあるのだ。

ナチスドイツが「自由な言論のショーウィンドウ」として『フランクフルト新聞』をあえて発刊させ続けた事例からも明らかのように、「自由」自体が一種のソフト・パワーとして機能しえた時代はあったし、現在もそれは継続しているのかもしれない。しかし、ここで叫ばれる「自由」が「国家からの自由」であったとしても、やはり国家のブランディング戦略に回収されていく。オーストラリア人の著者だからこそ、アメリカにおいて覇権を握っていた「自由」という観念の魅惑的かつどこか不条理なあり方について、さらに掘り下げることが出来たのではないか。そんな指摘もできる。しかし同時に、そうした議論の素材を提供する歴史書として、本書は一級の価値を持つているとも言え

るのである。

### 三 娯楽と教育の融合

前章で論じたように、アメリカの商業放送ネットワークは自身の既得権益を確保するために、様々な形で広報戦略を展開した。しかし、彼らは単に広報戦略にだけ力を注いだわけではない。自分たちが娯楽だけではなく、教育的機能を担うことも出来るというアリバイが、彼らには必要だったからだ。娯楽性と教育性を併存させた番組作りは、商業放送ネットワークの幹部たちにとってはあくまでアリバイだったが、制作現場の人間や教育者、宗教家たちにとっては、新たな輝ける可能性だった。本書にはそうした試みを主導した多くの魅力的な人物が登場する。当時ニューメディアであったラジオは、娯楽による墮落という「不安」と、全ての人間に良質の教育を同時に受けさせることができるという「期待」、二つの感覚がぶつかり合う場でも

あったのだ。

### クラシック音楽の大衆化

ラジオという聴覚メディアを通じた教育と娯楽の融合が最も顕著に見られたのは、聴覚芸術である音楽分野であった。本書の冒頭にも少しだけ触れられているが、おそらくこの時代のアメリカほどクラシック音楽が大衆化した事例を他に見つけ出すことは難しいだろう。その陰にはやはり、商業放送ネットワークによる巧みな宣伝があった。本書の第三章はそうしたクラシック・ブームがなぜ必要だったのか、また、どのようにして起こったのかという点を詳細に論じている。それによれば、クラシック音楽放送は戦後、ハイ・プロウな人間が聴くものとしてニッチかつ高価な市場の宣伝と結びつけられるようになったが、戦前は全く異なる性格を持っていたという。こうした状況が作られた経緯は次のようなものだ。

前述のように、商業放送ネットワークは、教育的コ

ンテンツを提供することで、公共放送の代替となつて  
いるという「アリバイ」を必要としていた。その「ア  
リバイ」づくりにとつて最も適していたコンテンツこ  
そ、クラシック音楽だったというのである。次章で詳  
しく述べるように、当時のアメリカでは「市民的価値  
観」が非常に強い影響力を持っていた。そして戦前の  
アメリカにおいて、クラシック音楽は「市民的価値観」  
と強く結び付けて捉えられていた。すなわち、情報に  
敏感で、国際的な感覚を持ち、自分の感情をコントロ  
ールしながら理性的な討議ができる市民を、クラシッ  
ク音楽を通じて育成できると考えられていたのだ。  
もちろん、こうした発想に問題がなかったわけでは  
ない。クラシック音楽が黑人には理解されにくいもの  
であるという信念も根強く残っていたし、素人のクラ  
シック・リスナーを参加させるトーク番組については  
「借り物の価値観を表明させているだけだ」とする批  
判を当時亡命していたアドルノが述べている。とはい  
え、ポール・ラザーズフェルドやテオドール・アドル

ノといった当時の一級の知識人が注目するだけの価値  
が当時のクラシック音楽放送には存在したのである。

しかし、クラシックを聴く習慣のないリスナーたち  
にクラシックを受け入れさせるためには、ある仕掛け  
が必要だった。アメリカの放送局はクラシックを、労  
働者階級も好んで聴くようなフォーマットで放送した  
のである。具体的には、トスカニーニのようなクラシ  
ックの演奏家をスターに仕立て上げた。クラシック音  
楽をピュラー・ミュージックにしてしまおうという  
わけである。この試みはある程度成功した。当時のリ  
スナーたちに今もなお、クラシック愛好家が多いこと  
は、それを証明する事実である。また、本書一四一頁  
には、一九四二年に撮影された写真が掲載されている  
が、その様子は壯観の一言に尽きる。今日的にはクラ  
シックとは無縁のイメージを持つ兵士たちが野外でク  
ラシックに聴き入っている。その夥しいオーディエン  
スの数は、現在のロックフェスをほうふつとさせる。  
クラシックを「娯楽」として認識させることで、アメ

リカの商業放送ネットワークは高級文化を「楽しませながら教育する」ことに成功したのである。

以上のような動きを本書は、ラジオネットワークを初めとする情報の送り手側の資料から明らかにしている。ただ、本書全体に通底することだが、おそらく資料的制約のため、受け手側の主観についてはほとんど焦点が当たっていないことは指摘しておくべきだろう。演奏家をスターに仕立て上げる仕掛けが成功した背後には、受け手側の欲望も存在したはずである。市民的価値観を世論が支持していたことは随所で指摘されているが、そのような価値観を内面化し、クラシックの消費を活発に行なうようになった受け手側の主観に踏み込んだ資料が存在すれば、本書はよりイマジネーションに富んだストーリーを展開できたのではないだろうか。

### 言語表現が創ったアメリカの自画像

クラシックの成功は、こうした演奏家のスター化を

含む宣伝戦略によって成功したが、教育と娯楽の融合は一般の番組にも見られた。教育を「大衆の国民化」として理解するならば、その最も顕著で、継続的なものは放送時に用いられる言語そのものである。本書では、そうした放送時の口調の問題にも言及している。アメリカの商業放送とBBCのアナウンサーの口調の違いについて論じているのだ。

イギリスのBBCは標準的な言葉で物事から距離をおき、威厳を持って話す形式をアナウンサーの模範としていた。これに対して、人気こそ権威であったアメリカでは、一定程度「正しい話し方」を求められるアナウンサーとその他の話者が併存していた。BBCのアナウンサーが無名であったのに対して、アメリカの放送に登場する話者たちはまさに「パーソナリティ」でなくてはならなかったのだ。

こうした親しみの問題は、前章でも論じたようにアメリカでBBCが叩かれ、商業放送が持ち上げられる根拠となった。言語の「自由」さを「雑音」として廃

したイギリスに対して、むしろアメリカではそれを「美」として持ち上げる傾向すらあったからだ。こうした言語の「自由」さはアメリカという国家に包摂される共同体の境界を明確にしていくことにも寄与していたと筆者は言う。アメリカで人気を博したコメデイ番組などでは、民族、人種、性別を示す誇張された表現が繰り返し用いられていた。それは言語の新奇さを共通の興味とする新しい共同体が生み出されていく過程としてとらえることができる。これこそは、アメリカのよいうな広大で多様性に富んだ国において、全国放送が担った重要な機能であった。

以上で紹介してきた言語の多様性に関して、本書にはとくに教育と関連付けた記述がない。しかし、後述するように、筆者が教育とプロパガンダは区別できないという立場を明確にとっている以上、こうした国家枠組みにかかわる問題もまた、教育の一部として論じてよいはずである。国家の成員が持つ多様性の認識こそは、ニューディール期の多元主義的なアメリカを象

徴する教育の産物に他ならないからだ。

また、こうした多様性の認識を広めるにあたって、誇張されたイメージが果たした役割についても、一つの教育論として読み解くことができる。本書で紹介されているラジオコメデイアンたちは、アフリカン・アメリカンでありながら、アフリカン・アメリカンの特徴的なアクセントや語尾を学び、誇張した表現を行なうことに情熱を燃やしている。このことは、大和田俊之『アメリカ音楽史―ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップホップまで』（講談社）で論じられている偽装の黒人音楽史というテーマと親和的である<sup>10</sup>。現実よりもはるかに誇張された形ではあるが、確実に人々のイメージをとらえ、笑いを誘いながら、「これもアメリカの一部である」と認知させる。現代的に見ればステレオタイプや偏見を助長すると指摘されかねないこの機能は、当時のアメリカにあつては、合衆国の多元的な全体像をイメージさせるという教育効果を担っていたのではないか。教育の意味を広く捉えるならば、

本書はラジオの教育史として読むこともできるのである。

#### 四 市民的価値観がはらむ問題

本書の後半は市民的価値観をラジオが内在化していく経緯と、その挫折を描き出している。ここにはラジオという媒体を用いた場合に限らず、市民的価値観が不可避的に突き当たる問題がよく表れている。この論点こそは、単なるラジオ史というだけにとどまらない普遍性を本書に与えているといえよう。

#### 「能動的聴取者」の誕生

本書後半は一九二〇年代にリップマンとデューイの間で交わされた議論が始まる。『世論』や『幻の公衆』の著者として知られるリップマンは、一般人が公的なことさらに関与する能力に対して懐疑的な見解を示している。自身の仕事を含む私生活を送りながら政治的

なことがらについて考え、判断を下すことなど、不可能だというのである。一方、デューイはラジオを含むマスメディアによって、人々が異なる意見を持つ他者との討議へと開かれていくと考えていた。ラジオによって「巨大な社会」は「巨大な共同体」へと統合することが可能だと主張したのである。これらの議論を経て、一九三〇年代におけるアメリカのラジオはデューイ的な理念を基盤として発展していくことになる。

ラジオがデューイから引き継いだ理念を体現しているのは、視聴者参加型の討論番組である。本書では、具体的にいくつかの番組を取り上げる中で、当時のラジオがいかにして「理想的な聴衆」を作り出そうとしていったかが描写されている。この「理想的な聴衆」像の根拠となっていたものが市民的価値観であった。異なる意見を持つ他者と対話し、相手が正しい場合には喜んで自分の考えを変える理性的な聴衆。ここに現れているのは、ユルゲン・ハーバーマスの言う「市民的公共性」の理想そのものである。

こうした市民的価値観がアメリカで受け入れられていった背景には、ラジオの効果に対する恐れがあった。毎回、一般人を招いて討論に参加させる番組、『People's Platform』の司会者を務めたライマン・ブライソンの主張に関する筆者の指摘はこうした事情を鮮やかに浮かび上がらせている。

もしも、プロパガンダが虚言であり、教育が真実なのであれば、問題は非常に単純だ。ラジオがプロパガンダを撲滅すればよい。しかし問題は、プロパガンダが一般的に考えられている教育の主体と「同格の他者による教育」に過ぎないことだとブライソンは主張する。ブライソンがラジオにおいて行なってきた教育的取り組みは、こうした挑戦的なパス・ペクティヴィズムの基礎の上にあったのだ。

プロパガンダと教育が区別できないとするこの視角

こそ、本書の核心であるといえよう。こうした考え方を筆者は当時の専門家の議論から抽出した。一九三〇年代当時にもこうした発想を持つ人々はいたのである。彼らはパス・ペクティヴィズム、すなわち人の視点によってモノの見え方は違うという考え方を徹底して伝えることで、商業的プロパガンダを含むラジオの効果に対抗しようとした。こうしたパス・ペクティヴィズムに立脚すれば、何よりも個人が意見を形成するところが重要になる。ここに、現在まで多くのメディア研究で繰り返された理想像、「能動的聴取者」という概念が誕生する。能動的に情報を取捨選択、解釈し、それについて語ることのできる人物。これこそが、一九三〇年代のアメリカで提示された理想のリスナー像であった。

しかし、本書はそれによって導かれた皮肉な結末に言及することも忘れてはいない。一九三八年にアメリカに亡命したテオドル・アドルノがアメリカのラジオを研究し始めた時、彼を絶句させたのは、ラジオ局

に寄せられた膨大な数の聴取者たちの手紙の中身だった。そこにはごく個人的な事柄が縷々書き綴られていたのだ。アドルノにしてみれば、これは不可解な現象だった。なぜ、ラジオ局に向けてこれほど個人的な内容の手紙をリスナーたちが書き送るのか。彼が下した結論は「従順な能動的聴取者たち」という言葉に集約される。自己の意見を表明するよう促す市民主義的教育は一見して成功したように見える。しかし、彼らはラジオからの要求に従順であるからこそ、このような行動に出たのではないか。そこには一見能動的で自己の意見を表明しているように見えながら、情報への耐性がなく、意見と感情の区別もつかない危ういリスナーたちの姿があった。これこそが、市民的価値観がはらむ第一の問題であったといえよう。市民的価値観に基づく理想は、一見達成されたように見えながら、実のところその不可能性を露呈していたのである。

### 市民的パラダイムの挫折

それでも、市民主義的教育観は見かけ上の成功のため、簡単には打ち捨てられなかった。市民的価値観に基づくラジオ放送は一九三〇年代を通して推進され続けたのである。その過程で起こった現象こそ、市民的価値観がはらむ最大の問題を浮き彫りにしている。デューイの予想に反して、こうした価値観は人々に分断をもたらしたのである。ここまで論じてきたように、市民的価値観を理想として掲げる人々はあらゆる意見を等価なものと考え、なるべく多くの異なる意見に人々が触れることに価値を置いていた。しかし、限られた電波の中でそれを実現しようとしたことで、ラジオは慢性的に文化的な闘争の場になってしまったというのだ。

そうした分断はコンテンツやその製作者のレベルにとどまらなかった。元来、パースペクティヴィズムに基づいているアメリカの市民的価値観は単一の正義を前提としない。そこにある唯一の基準はオープンかク

ローズか、すなわち変化に開かれているか否かであった。それは一見、非常に自由主義的で平等な社会を招来するかのように見える。しかし、こうした基準すらもやはり人を選別する契機となりうる。ロウ・ブロウやハイ・ブロウなどという従来よく言及される階層性ではなく、市民的価値観に適合的かどうかという観点による分断に注目したことは、本書が持つ革新性の重要な一要素であろう。

そうした当時の人々の感覚に迫る重要な事例が本書では詳細に論じられている。ハドリー・キャントリルの『火星からの侵入』で有名な『宇宙戦争』パニックだ。『宇宙戦争』パニックとは一九三八年に放送されたオソン・ウエルズのラジオドラマによって人々がパニックに陥った事件を指す。アナウンサー口調で火星人の襲来を伝えるラジオドラマを、一部のリスナーたちは真実だと思ひこんでしまったのである。メディア論の領域において、このパニックはこれまで長らく議論の的になってきた。この事件に対する見方は、メデ

シアの効果に対する評価と表裏一体だからだ。パニックの規模を大きいと判断すれば、強力効果論に与することになるし、小さいと評価すれば限定効果論の立場をとることになる。しかし、筆者の関心はこの事件の評価にあるわけではない。筆者のねらいは、この事件に対して知識階級とリスナーたちがどのように反応したかを描き出すことにあった。

結論から言えば、このパニックを受けて、知識人たちは情報に流されやすいリスナーたちを手厳しく非難した。ある知識人からはラジオを「子供用」「大人用」「バカ用」のチャンネルに分けるべきだという意見まであったという。ここには、市民社会的パラダイムに順応できないリスナーを排除しようとする知識人側の意図がはつきりと見て取れる。もちろん、こうした動きに対して大衆の側も反発を持った。彼らの意図を汲み上げたポピュリストたちの動きについても本書は扱っている。

ポピュリストたちは市民社会、パラダイムに則ったラ

ラジオ放送を中央集権化と独占化の流れであるとして批判した。彼らはラジオから教育的要素や政府による隠然たる管理を完全に放逐しようと考えたのである。ポピュリストたちの批判はある意味的を射たものだったが、彼らは批判する言葉を持つてはいても、構築すべきビジョンは持ち合わせていなかった。それ以前の市民社会、バラダイムにとって代わるものを提示しえなかったのである。

こうして、ラジオに託された市民的野望は分断をもたらし、頓挫していった。それにとどめを刺したのは、太平洋戦争の勃発である。真珠湾攻撃以後、ラジオは戦況を伝え、自国の考えを放送するための役割を担うことになった。ルーズヴェルトによる炉辺談話もまた、ラジオの戦争利用の好例である。

本書の終盤には、戦後間もない時期のアメリカのラジオに対する知識人たちの失望が描き出されている。市民社会、バラダイムは崩壊し、ポピュリストたちによる批判も新たなラジオの在り方を提示することができ

なかったという事実は、ポール・ラザーズフェルドやエーリッヒ・フロムをはじめとする知識人たちに悲観的な展望を抱かせた。戦後のことを描写した本書の終章が「トスカニーニからシナトラへ」と題されていることは象徴的である。クラシックを高級文化として賞揚される市民的価値観はジャズに熱狂する若者たちの消費社会的価値観へと席を譲ったのである。フランク・シナトラが若者から熱狂的に支持されたとき、知識人たちにはそれを批判することしかできなかった。感情を煽るメディアは市民社会、バラダイムにとって敵でしかなかったからだ。

## 五 おわりに

冒頭に述べた通り、本書は歴史書ではあるが、普遍的な論点を多く含んでいる。本論文では、それらの要素をできる限り抽出してきた。そうした中で見えてきたのは、ニューメディアを扱った研究が教育論や階

級論と結びつきやすいということだ。このことは、ニューメディアが現れた時、人々が常に同じ欲望を抱くということを示している。実際、本書と同様の観点で他のメディアを扱った研究も散見される。最後にこの二つの観点に基づいて、本書と他の研究の間にある関連性を指摘しておきたい。

### ニューメディアへの期待と不安

ニューメディアと教育の関連性について本書と類似する視点を持つ研究としては、映画がニューメディアであった時代を扱った赤上裕幸の『ポスト活字の考古学―「活映」のメディア史1911―1958』が挙げられる。赤上の研究では、映画を教育メディアとして利用しようとした運動の栄光と挫折が描き出されているが、そこにいたるまでの経緯もまた、ラジオのケースと相似している。そうした運動が盛り上がるまでには、ラジオと同じく、映画もまた期待と不安の対象であったことが指摘されているのだ。<sup>③</sup>

一般にこうした「不安」の要素はまず真つ先に子どもへの影響に対する懸念として表明されることが多い。近代においては子どもこそ教育対象の中心におかれているからだ。赤上の研究においても、探偵映画『ジゴマ』がブームになった際、子どもたちが「ジゴマっこ」に興じることに懸念を示す大人たちの姿が描き出されている。同様の不安がテレビやゲーム、インターネットについても繰り返し表明されてきたことはもはや我々の記憶の範疇だろう。

そうした不安については歴史研究だけでなく、リアルタイムに反論が試みられているものもある。ステイブン・ジョンソンの『ダメなもの、タメになる―テレビやゲームは頭を良くしている』はその好例である。そこでは、テレビやゲームが子どもの頭を良くするという根拠が述べられており、テレビ、ゲーム悪玉論を徹底的に論破している。テレビやゲームの教育力に対する期待と言っても良い議論が展開されているのだ。<sup>④</sup>ニューメディアに対する期待と不安は「子ども」

を舞台に今も葛藤を続けているのである。

フリーリップ・アリエスによれば、「子ども」というカテゴリーが確立する契機は一七世紀の近代学校制度成立にあるという<sup>6)</sup>。しかし、アリエス自身が子どもと大人の境界をリテラシー能力の有無と関連づけていることから分かるように、ニューメディアの登場はその境界を再編するきっかけになりやすい<sup>6)</sup>。ニューメディアに対する期待と不安はこうした境界の揺らぎの表れとしてとらえることもできる。

しかし、こうした一般的な流れに反して、本書では一貫して成人教育が中心に置かれている。現在では「子ども」というカテゴリーに対して非常に敏感なアメリカを舞台にしているにもかかわらず、ニューメディアをめぐる繰広げられる教育的葛藤が「子ども」という対象に向けられていないのだ。その一つの原因は、アメリカのラジオが広告媒体を起源としていることにあると考えられる。当時、また「子ども」は消費者として眼差されていなかった。だからこそ、ラジオは大

人の媒体として扱われたのではないだろうか。裏を返せば、広告媒体としてのイメージが強いメディアについて、子どもへの影響が議論されることは、消費社会の子どもへの浸透とパラレルな現象であると考えられる。そうしてみると、シナトラに熱狂する若者たちに対する知識人たちの戸惑いは、来たるべき消費社会に対する戸惑いでもあったのではないだろうか。本書の射程の延長線上には、教育と消費社会の問題が存在するのである。

### 脱階級という神話

本論文中で述べたように、市民的価値観が逆説的に新たな階級を生み出したという指摘は、本書が提示した重要な視点である。前述のリテラシー能力は子どもと大人だけではなく、階級の境界にも深く関連しているのだ。

ニューメディアが生み出す新たな階級の問題に関しては、例えばキャロリン・マーヴィンの『古いメディ

アが新しくなった時——一九世紀末社会と電気テクノロジー」で詳しく論じられている。それによれば、電子メディアが登場したとき、技術者たちは一般人の無知を蔑視する傾向にあったという。ニューメディアは新たなテクノクラートを生み出す。その意味で、ラジオの送り手に注目している本書はテクノクラート論として読み解くこともできるのだ。

ただし、専門家ではない一般大衆の間で内面化される階級意識はそう簡単には変わらない。新たな階級秩序を生み出すのはやはり、それ以前の階級秩序において上位にある者だからだ。その意味で、本書が指摘した新たな下層階級の誕生とは、メディアが既存の階級秩序を変えなかったという指摘として読むこともできる。

メディアが社会を変えようという幻想に対する批判としては、佐藤俊樹の『社会は情報化の夢を見る——「新世紀版」ノイマンの夢・近代の欲望』に詳しい。技術は人間が作るものであり、それゆえ、人間の欲望から切り離し得ない<sup>8)</sup>。そしてその欲望とはいつの時代もそ

う変わらない。本書のようなメディア史が普遍性を持つ由縁である。

それでも人が「脱」信仰を抱き続けることは、インターネット時代に登場したネチズン論が証明している。佐藤卓己の『現代メディア史』は、こうした欲望をマルクス主義の変奏であると指摘する。情報化の次なる社会変化においてもやはり脱する対象は同じ、すなわち、国境であり、労働であり、そして階級ではないかと。<sup>10)</sup>

もちろん、本書もこうした視点は共有している。最終章は、ラジオに対して抱かれた期待がテレビへそのまま移行したことを指摘した上で次のように締めくくられている。

一九九〇年代には、インターネットこそアメリカにおける市民的な生き方を復活させるだろうと考えられていた。こうした循環する歴史によって、シニシズムに陥るべきではない。そうではなく、

希望と失望をはらんだ歴史上の各サイクルにおいて、何が起こっていたかを理解しようと試みる契機とすべきだ。それは、次なる大きなメディアを理解する助けになるはずである。<sup>(11)</sup>

普遍性を持ったメディア史を力強く描ききった本書は、歴史書であるにとどまらず、人間社会に対する深い洞察を含んだ社会科学の名著であるといえよう。

- (1) 大和田俊之『アメリカ音楽史—ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップホップまで』講談社、二〇一一年。
- (2) Goodman, David. *Radios Civic Ambition—American Broadcasting and Democracy in the 1930s*. New York: Oxford University Press, p. 98.
- (3) 赤上裕幸『ポスト活字の考古学—活映—のメディア史1911—1958』柏書房、二〇一三年。
- (4) ステイブーン・ジョンソン『タメなものは、タメになる—テレビやゲームは頭を良くしている』(山形浩生ほか訳、翔泳社、二〇〇六年。
- (5) ファリップ・アリエス『三世の誕生—アンシアン・レジームの子供と家族生活』(杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房、一九八〇年。
- (6) こうしたことを論じた代表的な研究としては以下を参照。ニール・ポストマン『子どもはもつけない』(小柴一訳、新樹社、二〇〇一年。
- (7) キャロリン・マーヴィン『古いメディアが新しくなった時—9世紀末

社会と電気テクノロジー』(土井俊哉ほか訳、新曜社、二〇〇三年。

(8) 佐藤俊樹『社会は情報化の夢を見る—「新世紀版」ノイマンの夢・近代の欲望』河出書房新社、二〇一〇年。

(9) ネチズン論としては、例えば以下の文献が挙げられる。マイケル・ハウベン&ロンダ・ハウベン『ネティズン—インターネット、ユースネットの歴史と社会的インパクト』(井上博樹・小林統訳、中央公論社、一九九七年。

(10) 佐藤早己『現代メディア史』岩波書店、一九九八年。

(11) Goodman, op. cit. p. 311.